

実技系科目のシラバスに関する研究(2) —2009年「楽譜を読む能力の開発」の検証と展開— 音楽形成力の拡大を目指して

伊達華子

地域教育文化学部 文化創造学科

植木由利子・古賀 望子

地域教育文化学部 文化創造学科 非常勤講師

(平成22年9月29日受理)

要 旨

本研究は、2010年2月の山形大学紀要に発表した「実技系科目のシラバスに関する研究」の続編である。前稿では、ピアノⅠA/Bの育成の目標を「楽譜を読む能力開発」に特化した授業運営の在り方をピアノ担当教員で検討し、新たなシラバスを策定した。新シラバスでは15回の授業中1回を全体授業に充て、ピアノ実技の授業の目標とねらいを明確にし、自主練習に於ける正しい方向性を学生に示した。また、その到達度を図るために新たにセメスター課題を導入した。この新シラバスに従って、22年度入学のピアノ専攻学生は前期(ピアノⅠA)の授業を終了している。

本論は、終了した前期授業運営を検証し、1年次後期(ピアノⅠB)の授業運営の見直しと来年度2年次(ピアノⅡA/B)のシラバス策定を目的としている。

はじめに

本稿は、2010年2月の山形大学紀要に発表した「実技系科目のシラバスに関する研究」の続編である。前稿では、ピアノⅠA/Bの育成の目標を「楽譜を読む能力開発」に特化した新たなシラバスを策定した。新シラバスでは15回の授業中1回を全体授業に充て、ピアノ実技の授業の目標とねらいを明確にし、自主練習に於ける正しい方向性を学生に示した。

本論では、新シラバス^{*1}で「楽譜を読む能力開発」のために新たに導入された「全体授業」と「セメスター課題」が当初の目標通りに機能していたかどうかについて実技試験、学生アンケート、教員アンケート等のデータから検討を行う。その検討をふまえ、1年次後期(ピアノⅠB)の全体授業の在り方、セメスター課題を決定し、続く2年次(ピアノⅡA/B)の授業計画の方針を決定し、シラバス策定を行う。

現在、読譜力に重点を置いた新シラバスによるピアノⅠAの15回の授業実践を終えたと

¹ 伊達華子・植木由利子・中畑淳・古賀望子「実技系科目のシラバスに関する研究—楽譜を読む能力の開発—」『山形大学紀要(教育科学)』第15巻第1号(平成22年2月)37—39頁。

ころであるが、筆者のねらいがさまざまな場面で有効に機能し始めていると感じている。まず、全体授業で当該授業の目標とねらいを具体的に示し、確認のための Semester 課題を課したことで、学生達には1つの目標を共有して授業に臨む姿勢が生まれた。また、教員側にとっては、授業が対個人授業としてではなく、受講生全体を見据えたものとして指導を行う形に変化したことが挙げられる。これを踏まえ大学における実技指導の在り方を探り、2年間の授業運営の方向性を明確に示したい。

第1章 ピアノ I A 前期授業における試みとその報告

I 全体授業について

I-1 全体授業の実施

今年度、ピアノ I A のシラバスでは新たな試みとして、第二回目の授業を1年生の全受講生と担当教員参加による全体授業とした。全体授業とした意図は、当該授業の概要・授業テーマ・ねらいを授業のスタート時で明確に示すことによって、以降の授業をよりスムーズに運営することである。学生の演奏の進捗度はさまざまであっても、授業のモットー「楽譜を読む能力の開発」の概念を共有し、授業を進めていくための手段として導入した。前期終了後に行った学生および教員へのアンケートからは、全体授業において「読譜」に対する注意を学生に十分に促したことにより、楽譜を読むことの意味とその大切さ、さらに「読譜」が演奏の出発点であるという指導方針が定着し始めた様子が見て取れる。一回の授業で理解できることは数少ないものであろうが、楽譜に書かれている内容を理解しようとする意識が学生の中に芽生えてきたことは確かである。

I-2 全体授業の内容について

全体授業は、第一回のオリエンテーション時に授業で取り上げる課題を提示し、第2回授業までに自主練習を課して行った。課題はツェルニーの50番練習曲 (Op.740) の中から第1、4、6、7番とし、各学生の希望に従って割り当てた。選曲に当たって考慮したのは、ほとんどの学生が既に取り組んでいるもの、また楽曲の内容が読み取りやすいもの、という点である。言うまでもなく、この練習曲集は指の技術の熟練を習得する目的のために系統的に書かれたものであるが、筆者らは、「楽譜を読む」という概念に立った音楽形成²の観点からここに挙げた練習曲に取り組み、楽譜に書かれた内容を技術面にいかに反映させることができるかを示した。当日、1年生全員の前で各学生が割り当てられた曲を演奏、その演奏に対して、教員が学生に要求する演奏内容を提示し、演奏の改善を求めるという形で授業は進められた。その際、ここで要求される演奏内容とは、筆者らが教育理念として掲げる「楽譜を読む能力」とはいかなるものか、何故この様に書かれているのかという点について具体例を持って学生に明確に示すものである。

² 本稿では、「音楽形成」と言う意味を総合的に音楽の基礎能力を高め、自分の考えで演奏できるようになることとして用いている。

・指示内容の実際

・第1番は“静かに安定した手の状態での指の運動”と指示された4分の4拍子であるが、16分音符による音型と、さらに速度指定が2分音符で表記されている点から、16分音符を8つのまとまりで弾き、IからVへの音階の反復としてフレーズの方を捉えることが必要であると指摘した。また、右手の和音の進行はIからVの半終止までを1つの纏まりとして捉え、和音の反復においては、反復の持つ意味を考えて自然なクレッシェンドで弾くことを求めた。更に、静かに安定した手とは力みのない状態のことであり、次に来る音への準備または予測によって可能になる事を示した。

・第4番は“静かなスタッカートでの軽やかな動き”と指示された8分の6拍子が複合拍子であり、従って2拍子の流れに乗って弾くことが大切であると指示を与え、さらに“鐘のように”と記載されている3度の連続を軽やかなスタッカートで弾くために付随する3度下の指の重さをコントロールする必要がある、自己の内的要求で指のコントロールが可能であることを実践させた。また、安定した手の支えがあってはじめて指運動による打鍵が可能になることを伝えた。

・第6番は“はっきりとした分散和音”と表記されている。両手によるアルペジオが美しい和音の響きを作るためには左右の手が一つの纏まりとなり、次の音への受け渡しの際にはゆるやかな手首の移行、各指への重心移動が必要であること、一音ずつの受け渡しに際して細心の注意を払い音と音の間を歌うことがレガート奏法であること、また適切なペダルの使用も不可欠であるということ伝えた。

・第7番については、“右手における同一鍵盤上の指の交換”の指示があり、同一鍵盤上での軽やかな指の交換のための柔軟な手首の使い方について説明した。第1指に腕の重みが懸かってしまうと全体に重い音になるので、第1指の使用には細心の注意が必要であることを示し、続く跳躍では音程を意識することによって次の音を予測することが正確な打鍵につながることを示した。

この全体授業を通して明らかになったことは、以下の2点である。

- ①総じて楽譜を平面的に大雑把に捉えており、一つ一つの音の持つ意味に対する意識と注意力が低いため、音の吟味と奏法に対する工夫が足りない。
- ②楽譜を正確に読むということは楽譜から作曲家の意図を読み解くことであり、決して書かれた音符や記号を鍵盤上に置き換えることではないということを理解している学生は少ない。

しかし、さまざまな技術上の問題点について「楽譜を読む」観点から言及した後の演奏において、それまで学生が感じ、あるいは抱えていた技術面での困難が若干改善され、内容を理解することによって奏法の工夫が必要であることに気づくようになったことは注目し得るものであった。

I-3 全体授業の効果

I-2から明らかになった点は、学生の楽譜への意識が平面的で大雑把であり、作品から作曲家の意図を正確に読み取り、意味内容を深く考える能力、音楽形成の能力が確立されておらず、どちらかと言えば楽譜に記譜されたものを漠然としたイメージとして捉えた演奏を行っていることである。日本における多くの幼児音楽教育は、作音の訓練がなされ

ないまま楽器演奏へと進んでいく傾向があり、その弊害として音に内在する意味内容を明確に認識することなく指の訓練が先行する。新入生のほとんどの学生が少なからずこの問題点を有していた。しかし、全体授業以降の授業に於いては真剣に楽譜と向き合い、楽譜から作曲家の意図を理解し精神に触れようとする姿勢が全ての学生に見られた。1年次前期末に行われる実技試験の課題は古典派のソナタであり、その演奏には深い「読譜」によって作品を正しく「理解・解釈」する力が不可欠である。楽譜から適切なテンポを設定し、音楽の呼吸ともいえる拍節感を養い、調性を把握することによって豊かな音色感を心掛け、和声の理解に基づいて自然なフレーズの意識感を持ち、さらに古典派の様式と楽曲の形式を理解する。これら一連の意識を伝えることはかなり根気のいることであった。しかし学生は誠実に努力し、期末試験での演奏においてある程度の達成感を得ることができたことが窺える。

以上、全体授業を概観すると、「楽譜を読む」こと概念を伝え、授業目標を共有し、続く授業への道筋をつける、という全体授業の目的は十分に達成されたと考えられる。勿論、1回の授業で「楽譜を読む」ことの真の意味を伝え切ることには不可能であり、顕著な変化が期待できるわけではない。毎回の授業で言い続けることによって能力として定着するのであり、ゆえに継続することに意味がある。尚、教員側にとって全体授業の後、立ち位置を常に明確に意識でき、個人レッスンではなく受講生全員の授業としての授業運営を行うことができたことは大きなメリットであった。

Ⅱ セメスター課題について

Ⅱ-1 セメスター課題の選曲と評価

このセメスター課題は、前述した全体授業での目的である「楽譜を読む」ことが独習によってどの程度まで達成できたかを判断し、音楽形成力を評価するものである。

具体的なその内容と方法については、まず事前に選曲した課題曲を試験の3週間程度前に発表、全員に楽譜を渡す。この際、この楽曲についての指導を一切受けずに、まったくの独習によって練習を重ね、前期末試験において演奏することを説明する。

課題は、シューベルトのメヌエット ホ長調 D.335を選曲した。選曲のポイントは形式、時代様式的に学生がこれまで経験している程度の楽曲であり、ホモフォニーの楽曲であること。また、リズム・拍子感、和声・調性感についての理解の程度を判断できるものである、という二点である。評価の基準は以下の4点である。

表1 「評価の基準」

評価項目		内 容
①	形式	メヌエットという舞曲の形式とその特徴を理解して適切なテンポ設定ができているか。
②	リズム	アウフタクトを含めて拍子感とリズム感を身につけているか、トリオを挟んでテンポの一貫性が保たれているか、といったテンポや拍子感に関わる点。
③	和声・調性	調性による音色感が豊かであるか、また和声の理解に基づいて終止形を把握し、さらに和声の構成音と非構成音を認識することによって自然なフレーズ感を体現できているか、という音色やフレーズ感に関わる点。
④	記譜	スラーやsf等の指示に対する反応が的確であったかという譜面そのものに対する注意力に関わる点。

受講生8名の演奏を評価分類してみると、

- ① 概ねメヌエットらしい適切なテンポ設定がなされており、Trioとの一貫性も保たれていた。
- ② 3拍子のリズム感、すなわち強拍と弱拍の意識が薄いことに問題があった。8名とも1拍目に確実に落ち、2拍目で持ち上がり、さらに3拍目で次の小節の1拍目に向かう、という音楽上のいわゆる呼吸が希薄であることが感じられた。さらにこの問題から、拍子の上で不適切なペダル使用という問題も派生しており、今後の指導において大きな課題となるであろう。
- ③ 調性や和声についてかなり力不足である。音楽は和音の連結による和声進行の上に旋律が存在し、和声もたらず垂直軸の響きと旋律もたらず水平軸の流れが相まってフレーズを形成している。こういった音楽の成り立ちを考えても、フレーズを把握するためには和声の理解が不可欠である。いわゆる句読点にあたる終止形（I→Vの完全終止、V→VIの偽終止、Vの半終止）を見つけ、それに従って和音の方向性を見極め、比重のかけ方を捉えることは、自然な表現をするうえでの決め手となる。さらに、和声を理解することによって和声の構成音と非構成音（経過音、倚音、刺繍音、掛留音）を認識し、より豊かな表現を期待することができる。何より“音質”あるいは“音色”といわれるものは、和声や調性によって裏付けされた意味のあるものでなければならない。和声進行の理解に伴い、自然なフレーズ感、豊かな音色感、ひいては和音間の「重力」のようなものを感じる音感覚を磨く必要があるだろう。
- ④ 記譜された記号の意味そのものは“知って”はいるものの、その記号が示唆する作曲家の意図を理解し、その楽曲に相応しい内容を的確に表現する段階には至っていない者が多かった。

以上、独習で演奏されたセメスター課題は、最初の全体授業での演奏と比較するとかなり“考えられた”演奏であった。少なくとも記載された記号や音符を正確に表そうとする姿勢が見え、さらに自身の演奏を客観的に聴く姿勢も見られた。しかし、前述の評価からも明らかなように、拍の意識（リズム）と和声・調性の理解力は低く、それによって躍動

感や音色感、フレーズ感に欠ける演奏内容となり、表現力という点において大きな課題を残した。

セメスター課題の演奏を通して具体的にみえてきたものは、拍の意識（リズム）と和声・調性の理解の力不足である。この問題を次の学期でどの様に改善していくのかを検討しなければならない。

和声・調性、拍の意識（リズム）等の音楽の理論的基礎能力教育はソルフェージュ教育として大学でも授業が開講されている。また、それが受験科目でもあることから、学生は入学前に既にソルフェージュ教育をうけている筈であるが、理論的知識が音楽を形成し、“意味を持った音”として変換する教育が曖昧のままに進んできていることが最大の課題として見えてくる。

筆者が、授業運営の理念とした「楽譜を読む能力の開発」とは、楽譜から読み取った音を、調性や和声をふまえた音として具現化していくという音楽形成力の向上を目指すものである。楽曲全体を理解したうえでどのように演奏するべきかを考え、その内容に見合った演奏とはいかなるものかを判断する力の育成でもある。セメスター課題の導入によってこの授業の理念達成がなるものではないが、毎回の授業で確認をし、修正し、目標を見失わない指導が目標達成の道であろう。学生が真剣に楽譜と向き合う環境作りとしてセメスター課題は有効であった。

Ⅲ アンケートの要約

Ⅲ-1 学生アンケート

前期末試験終了後、学生に対して前期授業に関するアンケートを行った。設問とそれに対する回答は次の通りである。

設問①：前期に行われた全体授業の意図を十分に理解できましたか？

内容を簡単にまとめてみて下さい。

回答の抜粋：

- ・楽譜に書かれている音型を見つけ、その意味を読み取る。
- ・他の学生の演奏と自分の演奏の違いを意識することによって、楽曲に対する理解を深める。
- ・「楽譜を読む」とはどういうことを学ぶ。
- ・「楽譜を読む」とは、単に音符や記号の通りに演奏するのではなく、そこから曲想や表情を読み取り、それに見合った演奏をする。
- ・楽譜を深く読み、作曲者の意図を理解する。
- ・従来の少人数授業と違って全員が同時に二人の先生から意見をもらうことによって、学年全体の傾向やこれからの課題を把握し、技術と表現の向上に役立てていく。
- ・拍子に見合った拍の重みや、音の方向に従って演奏すること等、雰囲気や弾くのではなく、楽譜を深く読み取り、正確に弾かなければならない。
- ・音楽を演奏する上での基本的要素をしっかり理解し、今後の演奏に生かすための授業である。

アンケート回答から、7割の学生が全体授業の趣旨と教員側の意図をある程度は理解していることがわかる。ただ、その理解が実際の演奏に結び付くまでに至っていないのは前述の課題演奏の演奏内容からも明らかである。楽譜を読むということの真の意味を理解し、それを意識化し確立させるには継続してその問題を追求し続けることが大切であろう。

設問②：全体授業が、前期におけるあなたの練習に生かされたと思いますか？
また、全体授業がその後の授業の理解に役立ちましたか？
あれば、どのような点ですか？

回答の抜粋：

- ・何も指示のない楽譜を見て、どう弾きたいかを考えられるようになった。
- ・ほかの人の演奏を聴くことで、自分の演奏の問題点がわかるようになった。
- ・楽曲に対する適切な奏法を身につけることができるようになった。
- ・フレーズのまとまりや方向を意識して練習に取り組むようになった。
- ・曲をどのように演奏するべきか、ということを積極的に考えるようになった。
- ・楽譜を読むことの大切さを強く感じたことによって、自分の頭で考え、答えを見出すことができるようになった。
- ・全体授業で今後の課題や授業の方向性を提示されたことで、その後の授業の理解に役立った。
- ・演奏するにあたって基本的なことを考えて練習するようになった。

この設問に対し、全学生が全体授業の指導の内容について各人なりに理解し、練習および授業への取り組み方に主体的な意識が芽生えたと答えている。しかし、楽譜を“正確に読み解く”ことと“表面的に読む”ことの大きな違いを認識し、一つ一つの音符とそのつながりにどのような意味があるかを考え、そこから作曲家の意図を読み取ろうという意識が必要であるということにはまだ思い至っていないことが分かる。しかし、楽譜を読むということそのものが、自らの頭で考えることであるという点に学生が気づき始めたことは大変意味深い。

設問③：セメスター課題の自己評価をして下さい。また、どのような点に配慮したのか、述べて下さい。

回答の抜粋：

- ・頭の中にイメージはあったはずなのに、薄い内容になってしまった。
- ・アウフタクトの曲であること、メヌエット（舞曲）であることに配慮して演奏した。
- ・3拍子の舞曲なので、主題部分を華やかに演奏しようと心掛けた。
- ・スラーのある音とそうでない音の違いや、フレーズ毎に分けた時にどのような表情をつけるのがふさわしいか、などを中心に曲の流れを組み立てて演奏することを心がけた。
- ・メヌエット（舞曲）としてのテンポや表現は意識できたのではないかと思う。
- ・デューナーミクが乏しかった。
- ・最も気をつけたのは拍子感である。
- ・アウフタクトで始まる曲だったが、1拍目をきちんと落とすことに気がつけた。
- ・メヌエットなので、重くならないようにした。軽快に始まり、TRIOとの違いをはっきりさせた。
- ・曲の解釈の仕方が甘く、「ロマン的な演奏になっている」と指摘を受けた。メヌエットについて勉強して練習すればよかったと思う。
- ・強弱や音色をよく考えながら演奏できた。

この設問では、全学生がセメスター課題の演奏に於いて、各人なりに自身の頭で考え、さらに自身の演奏を客観的に聴き、判断する意識を持ち始めていると答えている。このことから、楽譜を読み、それを正しく理解・解釈し、その内容を豊かに表現する、という演奏における大切なプロセスの第一歩を学生が踏み出したといえよう。しかし、作品の様式、作曲家自身や作曲家の語法および作曲の手法などについての記載が全くないことから、楽譜を作曲家からのメッセージとして受け止め、そこに作曲家の強い意志が込められたものとして捉え、様式や作曲技法についての知識を演奏に反映させる訓練はされていないと考えるべきであろう。

設問④：入学前と現在の自分の演奏に何か違いを感じますか？

回答の抜粋：

- ・具体的な指の使い方、腕の重みを意識して演奏できるようになったと思う。
- ・入学前より楽譜を読む力がついたように思う。
- ・楽譜をきちんと読むことで、どのような奏法で演奏すればいいのかが少しわかるようになった。
- ・譜読みの仕方を学び、曲と向き合えるようになった。
- ・入学前は、ただ譜面通りと言われる通りにしか弾けず、自分から積極的に考えることが殆どなかったが、前期の授業で学んだことで、しっかりとした自分の意志のある演奏に少し近づけたように思う。その点で、今回の試験のセメスター課題は自分の成長を試す良い機会であったと思う。
- ・自分の苦手部分がはっきり自覚できるようになった。
- ・それぞれの音型にはそれぞれの適切な弾き方があることを知ったため、乱雑な弾き方が減ってきたように思う。
- ・表現について、論理的な音楽構成を意識して考えるようになったと思う。
- ・入学前は、曲を雰囲気だけで感じ取って指を動かすことや音色ばかり気をつけていたが、最近ようやく少しずつだが頭で考えて弾くことに慣れてきた。
- ・指をまっすぐに落とすことを学び、アルペジオが以前より弾けるようになった。
- ・演奏する前に、まず曲の内容、作曲家や時代背景について勉強するようになった。

この回答では、学生全員が各人の演奏において何かしら問題意識を持ち、その問題点を克服するための努力をした結果、ある程度の達成感を得たと答えている。

以上、学生アンケートからは、全体授業の導入により学生全員が1つの目標を共有し、その後の授業に於いても、セメスター課題に於いても、各人の理解の中で楽譜を読む姿勢を十分に示したということが見て取れる。新たなシラバスによる授業は、早い段階で学生に自分自身を見つめ直し、問題意識を持ち、自身で考え、習得のために工夫する機会を提供したと言えよう。

Ⅲ-2 教員アンケート

学生同様、教員に対しても前期末試験終了後、前期授業に関する以下アンケートを行った。

設問：

1年前期の試験を終え、新たなシラバスに沿って行われたピアノⅠAの前期授業運営が、私たちが目指した目標を十分に満たす方向に向かっているか、セメスター課題等が適切であったかをお答え下さい。

回答の抜粋：

① 全体授業について

- ・学生にとっては、大学でのピアノ実技のスタートラインの場を意識し、また大学生として求められる演奏とはどのようなものであるかという点を認識できたと思う。
- ・教員側としては、個々の学生に対して発する言葉の統一性が持てたことによって、シラバスに掲げた授業のねらいである“読譜能力・解釈力の育成”の観点からぶれることのない授業運営が可能になったと思う。
- ・全体授業が1年次のはじめに行われたことは、学生にとって在学中の自身の学習目標を意識化するために非常に有意義なものになったと思う。
- ・全体授業の後に続く授業において、拍子や調性に対する意識、音やフレーズの方向に対する注意力、和声に基づく音色の問題等に関する指摘に確実に反応するようになった。
- ・全体授業は後期においても必要だと思う。

アンケートに答えた3名の教員は、学生が持つべき問題意識と学習目標を確認する場として全体授業を導入したことが良い結果をもたらしたと答えている。さらに2名の教員は、全15回の授業運営を包括的に捉えることができたと言っている。

② 前期セメスター課題について

◇選曲

- ・ 今回の課題は、形式的、時代的、様式的にも、学生がこれまで経験している楽曲の程度を考慮しての選曲であった。
- ・ 独習による様式や形式の理解度を図る上で、長さ、難易度ともにふさわしい選曲である。
- ・ アウフタクトを伴う拍子感とリズムの問題、テンポ設定と那一貫性を見る上で適切な選曲である。
- ・ 和声の構成音と非構成音に対して意識を持つ上で適切な課題である。

3名の教員は、今回の選曲が適切であったと答えた。

◇試験での演奏および評価

- ・ 試験において、全体授業をふまえて楽曲全体を見渡し、楽譜上の指示を理解して適切に演奏できたかを評価したが、全体授業での演奏と比べて楽譜に対する注意力がかなり高くなっている。
- ・ 全体として楽譜を誠実に読もうとする姿勢が十分見られた。
- ・ 舞曲の形式およびリズム、終止形の把握によるフレーズ感に改善すべき点が見られた。
- ・ 調性や和声に伴う音色の工夫が求められる。
- ・ 演奏後、個々の学生に対して講評を行い、メヌエットの様式感、テンポ設定、アウフタクトを伴うリズム感、ペダリング、調性感、sfの扱い等に対して注意すべき点を指摘。

セメスター課題の演奏では、教員全員が全体授業の段階と比較して明らかに楽譜に対する意識が高くなり、楽譜の指示に従ってその内容を表現しようとする姿勢が大いに見られたと答えた。しかし、I-3でも指摘したように、拍の意識(リズム)と和声・調性の理解力が不足しており、作曲家の時代背景、様式、語法といった観点から作品を見る力は育成されていないことから、表面的な理解の上に演奏されていたと指摘している。

③ 後期セメスター課題の方向性および具体的楽曲について

- ・ ピアノI B、ピアノII A/Bで扱う課題は、われわれの2年間の指導の到達目標を明確に示す大事な指針である。1年次後期課題としては、コラールやフーガが適切と思われる。
- ・ I Bのセメスター課題として、ポリフォニーの楽曲を選び、楽譜を読む力をさらに強化したい。具体的には、バロック時代のコラールやプレリュード、簡単なフーガなどが適切と思われる。
- ・ I Aの課題を通して見えてきた問題についての改善を図るため、ポリフォニーの楽曲を課題として選曲し、さらに調性や和声についての理解を深めることを期待したい。
- ・ 後期の試験曲がバッハの平均律クラヴィーア曲集であり、その演奏にあたって声部の独立と声部間の音のバランスという点に注意を喚起することが必要である。その点を強化するためにコラールを選ぶことが適切であると考えられる。

回答では、後期課題として相応しいのはポリフォニーの楽曲であると教員全員が答えた。ポリフォニーは多声部が絡み合う音楽であり、各声部の横の流れと縦に織りなすハーモニーの色彩を瞬時に耳で捉え、いわば横の座標軸と縦の座標軸を常に意識し、立体的に音を聴き分け、弾き分けていくことが必要とされる。よってこれまで指摘してきた和声や調性に関する問題の解決には最も適した課題であろう。実際の作品の中で調性・和声を聴き、感じ、確認することが「楽譜を読む能力の開発」の原点である。

具体的な課題として、全体授業ではシンフォニアを取り挙げ、セメスター課題ではコラールを取り挙げることが提案された。

④ 2年ピアノⅡA／Bシラバスの到達目標、全体授業、セメスター課題について

◇到達目標

- ・学生が自身で新たな楽曲に取り組む時、楽曲に対する理解と適切な判断が必要である。適切な判断に基づいて音に変換する技術を身につけることこそピアノ基礎教育の基本であろう。自身の頭で考える足掛かりを掴むことが2年間の基礎教育における最大の目標である。従って、2年次の課題はその目標達成をより可能にするものを選ぶ必要がある。
- ・技術は思考の上に成り立つものであることを実体験する環境作りが何よりも必要である。
- ・ⅡA／Bでの読譜力と解釈力の育成に続き、ⅡA／Bではさらに表現力を発展させ、演奏技術の向上を目指す。セメスター課題については、ⅡAではⅡBのポリフォニーの発展。ⅡBではリズムに焦点をあてた課題が適切に思う。
- ・ⅡAにおいては、楽譜を読む力を発展させ、さらに表現力を深めることに重点をおくことが望ましい。続くⅡBにおいては、豊かな表現のために必要となる演奏技術の向上に重点をおき、最終的に、読譜力—表現力—演奏技術というトータルな演奏能力の向上が2年間の到達目標である。
- ・音楽を予測する能力を高めるために、初見演奏（初見視唱、初見視奏）を授業に取り入れることも今後の授業運営で考える必要がある。

◇全体授業

- ・2年次の到達目標を明確に伝えるために全体授業は必要である。
- ・全体授業によって、その後の授業における学生の理解度が向上することが期待される。
- ・全体授業は2年次においても必要であると思う。

◇セメスター課題

- ・セメスター課題の継続が望ましい。前期（ⅡA）ではポリフォニーの発展と確立、後期（ⅡB）ではリズムに関する補てんが必要と思われる。
- ・前期（ⅡA）では表現力を深める上で表情記号等の指示の多い楽曲、後期（ⅡB）では、さまざまなリズムに触れることによって確実なリズム感を養うため、変拍子やブルガリアンリズムなど多彩なリズムが含まれる楽曲が適切と思われる。
- ・到達目標の表現する力の育成には様々な音楽形式を知ることが必須であろう。

以上が、2年次の授業方針に関する教員3名のアンケートの回答である。既に前回の「実技系科目のシラバスに関する研究」に於いて1年次の育成目標を「読譜力の開発」、2年次の育成目標を「読譜力」をベースとした「表現力」と位置付けているが、教員アンケートでも2年次の授業方針・目標を「表現力の向上」と答えている。全体授業、セメスター課題の導入も続けて行うことを提案している。しかし、目指す表現力とは決して感性のみに偏った自己表現のことでないことは言うまでもなく、総合的音楽基礎能力を高め、音楽形成力を身に付け初めて可能になる。理論の裏付けとは、ひとつは和声や調性、拍子等、楽曲の内容を理解することであり、もうひとつは作品の構成、様式等、楽曲の背後を解する力である。その能力を両輪として初めて豊かな表現力を高め、さらに表現に必要な演奏技術の習得が可能になる。また、多くの楽曲に触れることも目標達成の要因となるが、そ

のためには読譜力の拡大が望まれる。アンケートの中で一人の教員が初見視奏の導入を提案しているが、読譜力を高める上でこれは是非検討すべきである。

以下に、学生アンケート、教員アンケートから見えた今後の方向性を示す。

・全体授業

- ① 全体授業でピアノ実技授業の教育理念と育成の指針を学生に示すことは、以後の授業運営に良い効果をもたらした。
- ② 全体授業は2年間続けるべきである。
- ③ 授業で取り上げる課題は当該学期の授業方針を示すものであり、楽曲の選択が重要。

・セメスター課題

- ① セメスター課題の演奏を通して具体的にみえてきたものは、拍の意識（リズム）と和声・調性の理解力不足と音楽形成力の不足である。
- ② 前述の問題点のうち、特に和声に関する理解力を促す目的で、1Bのセメスター課題にはポリフォニーの楽曲を取り入れ、改善を図る。
- ③ 後期ピアノI Bにおける育成目標は「和声の理解力の育成」とする。
- ④ これまでの検証から、2年次にもセメスター課題を導入し、2年間の継続を図りたい。

・教員アンケートから明らかになった2年次の教育目標

- ① 2年次における育成目標を「表現力の向上」および「音楽形成力の向上」とする。
- ② セメスター課題の導入も視野に入れる。
- ③ セメスター課題については、前期は様式感と豊かな表現力を養うためにロマン派の小品を、後期は確実な拍子感を確立するために様々な変拍子を含む楽曲を取り上げる。

Ⅳ 小 括

これまで、今年度新たに導入した全体授業とセメスター課題について、それらが「楽譜を読む能力開発」という教育理念の達成に向かって適切に機能していたかどうか、学生と教員に対するアンケートの回答から検証を重ねてきた。そこから、当初筆者が掲げた育成の目標達成に向かってそれらがうまく機能し始めていることがわかった。具体的には、楽譜上の指示に対する反応が的確になってきており、また、拍子や調性を意識して演奏するようになってきた点が挙げられる。さらに、学生の授業および日頃の練習に対する自発性と積極性が見られるようになった。このことは演奏内容にも確実に反映している。一方、今後の教育を方向付ける点も明確になった。これ等を踏まえ、Ⅱ章ではこれからの「楽譜を読む能力開発」と「音楽形成能力」の向上を目指した授業運営方針を示し、続いてピアノⅡA／Bのシラバスを策定する。

第2章 今後の授業運営の提案

I 1年次後期（ピアノⅠB）の授業運営の方針

I-1 ピアノⅠBの全体授業

前章の検証から全体授業は、授業の始めに授業目標・ねらい・方向性を明確に示すことによって、続く授業の運営に大いに有効に作用することが明らかになった。このことから、1年次後期においても全体授業を行うこととする。その授業内容は、Ⅲ-2で明らかになった和声や調性に関する問題点を認識し、その理解を深めることに重点をおいたものとする。そのための課題として、ポリフォニー（多声音楽）の楽曲を取り上げる。おそらく既習者が殆どであろうが、バッハのシンフォニア（三声）はポリフォニーの学習の基本であり、教材として適切であると考え。前期ⅠAのセメスター課題試験で明らかになった和声の理解不足に関する問題点をここで再認識させ、今学期の到達目標、「楽譜を読む能力」の概要を再度明らかにする。具体的な指導内容は、シンフォニアを題材として、和声の理解および多声音楽の理解を促し、その演奏に際して不可欠な指の独立と運指の問題について説明を行うものとする。さらに、声部間の音のバランスを聴き分ける“耳”（音の聴き方）の訓練について実際の演奏を通して指導する。

I-2 ピアノⅠBセメスター課題

全体授業で示したポリフォニーの楽曲演奏上もっとも注意すべき点である“声部の独立”、“声部間のバランス”についての習得度の確認に適した課題として、コラールまたは小フーガを取り上げる。選曲に当たっては特にバッハに特定せずに新たなコラール作品からの選曲も視野に入れる。

II 2年次（ピアノⅡA/B）の授業運営の方針

II-1 ピアノⅡA/Bの授業目標

2年次では引き続き「楽譜を読む能力」と新たに「音楽形成力」の発展を育成の目標とする。ⅡAにおける到達目標を“楽譜を読み、その内容を豊かに表現する”、ⅡBにおける到達目標を“表現力を深め、表現に必要な技術を習得する”とし、ⅠA/BからⅡA/Bにかけての2年間で“楽譜を読む能力”→“表現・創造する力”→“表現のための演奏技術の習得”というトータルな演奏能力の向上と発展を目指すものとする。これらの到達目標を踏まえ、2年次（ピアノⅡA/B）の授業運営は2010年度（ピアノⅠA/B）の新シラバスの形態を踏襲することとし、一連の育成の目標を改めて学生に対し明確に示す場としての「全体授業」と、理解度・達成度を確認するための「セメスター課題」を継続して実施する。

II-2 ピアノⅡA/Bの全体授業について

2年次ピアノⅡA/Bにおいても全体授業を行う。1年次の全体授業と同様に当該学期授業の方向性を示すのに相応しい楽曲を選曲し、受講学生の実際の演奏内容に対して前述の観点から問題点を指摘し、改善を求めるという形で表2に示す通り授業を進める。

表2 「全体授業の課題」

前期 全体授業の課題	後期 全体授業の課題
2年次前期（ピアノⅡA）における育成目標は「楽譜を読み」、「楽曲を正しく理解し」、それに基づいて「豊かに表現する」力の習得である。そのためには、作品の背景を知ることが必要であり、さらに正確な読譜力と解釈力に基づいて表現力を深めることが求められる。全体授業においては、ロマン派の小品（グリーグ：抒情小曲集、シューマン：ユーゲントアルバムなど）を取り上げ、I A/Bで明らかになった「和声の理解」「拍子の意識」の問題に加えて、作品の分析力・解釈力を定着させるための道筋を具体的な演奏例を挙げて示す。	2年次後期（ピアノⅡB）における目標は、「豊かな表現」のために必要な「演奏技術の向上」とする。豊かな表現のために必要となる演奏技術の向上と習得に重点をおき、楽曲の内容から求められる音色の問題とそれに見合った打鍵法と脱力、さらにさまざまな技術的困難を乗り越えるための練習方法や奏法の工夫を学生に具体的に示す。その方向性を示す全体授業では、I A/BからⅡAにかけて習得してきたことの集大成として、ロマン派の作品の中でも、ポリフォニーの要素を含む楽曲を取り上げることが適切である。具体的にはメンデルスゾーン：6つの子どもの小品Op.72などを取り上げ、ポリフォニーにおける声部の弾き分けと声部間のバランスという問題意識を持ちながら豊かな音楽表現を確立するためのテクニックを中心テーマとして、表現に見合った技術を習得するという学習目標を示す。

Ⅱ-3 ピアノⅡA/Bのセメスター課題

セメスター課題の導入による最大の利点は、これまでの無意識に楽譜を見て演奏するというレベルから、どのような内容が書かれているかを意識して「楽譜を読む」という姿勢に変化したことであろう。また、I Aのセメスター課題で明らかになった問題の解決のための課題としてI Bの全体授業のポリフォニーの課題が導き出されたように、「全体授業」の実施とこの「セメスター課題」の導入の2つは相互に作用し「楽譜を読む能力開発」という目標に向かって適切に機能している。2年間でのトータルな音楽基礎能力の向上を目標とする当該授業には大変は有効と考え継続する。セメスター課題は、表3に示す通りである。

表3 「セメスター課題」

前期 セメスター課題	後期 セメスター課題
2年次前期（ⅡA）は、様々な形式・様式を理解した上での豊かな表現力を深める課題として、ロマン派の小品（例えばショパン：マズルカ、シューマン：ユーゲントアルバムなど）が適切である。	2年次後期（ⅡB）は、拍子感・リズム感の確立に重点を置き、そのために様々な変拍子や多彩なリズムを含む楽曲（例えばバルトーク：マイクロコスモスなど）が適切である。

Ⅱ-4 読譜力強化と充実

教員アンケートの回答の中で提案された初見視奏は、授業の中で随時行うことを目指したい。初見視奏は読譜力を高める上でも高い効果が期待できる。初見視奏のための予見は、楽譜に書かれた音符を、音を出さずに音楽として豊かにイメージする能力につながり、音を個々に見るのではなく、和声進行によって作られた大きな「まとまり」として認識することを可能にする。初見視奏により楽譜の背後にあるものを素早く正確に読み取る訓練は、読譜力の強化にもつながり、牽いては、全般的な音楽基礎能力の充実にも貢献する筈

である。

Ⅲ 2011年度2年 ピアノⅡA／Bの新たなシラバス

これまでの検討を踏まえ、2011年度2年次（ピアノⅡA／B）の新シラバスを示す。

Ⅲ－1 2011年度ピアノⅡAシラバス案

ピアノⅡA PianoⅡA 担当教員の所属：地域教育文化学部文化創造学科，地域教育文化学部非常勤講師 開講学年：2年 開講学期：前期 単位数：2単位 開講形態：演習	
<p>【授業概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ ピアノ奏法の基本を再確認し、正確な読譜力・解釈力にもとづいた音楽形成力の発展と演奏技術の向上をはかる ・ねらい I 読譜力・解釈力の育成 II 表現力・創造力の発展 III 演奏技術の向上 ・目標 ロマン派以降の作品の様式とソナタ形式以外の様々な形式を理解し、楽譜を正確に読み、その内容を豊かに表現する。全体授業ではロマン派の小品を取り上げ、楽曲を正しく理解するための分析力・解釈力を高める。 <p>【授業計画】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の方法 各人 30分程度の個人指導 ・日程 第1回 ガイダンス（今後の授業の進め方・「セメスター課題」の説明を行う） 第2回 全体授業 第3回 実技演習① 第4回 実技演習② 第5回 実技演習③ 第6回 実技演習④ 第7回 実技演習⑤ 第8回 実技演習⑥ 第9回 実技演習⑦ 第10回 実技演習⑧ 第11回 実技演習⑨ 第12回 実技演習⑩ 第13回 実技演習⑪ 第14回 実技演習⑫ 第15回 実技試験 （学内公開） 	<p>◆実技演習①～⑫においては、各人の進度に合わせて業を進める。前期試験課題曲であるロマン派以降の品を中心に、以下の点を学ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・正確な読譜力と分析・解釈力にもとづいた表現力 ・調性感、和声感、拍節感、フレーズ感 ・正しい運指 ・楽曲にふさわしい音づくりとそれに見合った打鍵法 ・適切なペダルの使用 ・ロマン派以降の作品の様式や様々な形式 ・他の楽曲も取り上げ、楽曲の解釈・演奏能力の拡大 ・初見視奏

課題曲：①ロマン派以降の小品を暗譜で演奏

②読譜力開発のため「セメスター課題」を3週間程度の独習により視奏演奏課題曲は期末試験3週間程度前に掲示

【学習の方法】

授業は個人指導によって行われるが、授業時間内における他の学生のレッスンも聴講し、その指導内容を自分自身の学習に生かすのが望ましい。また、前回の授業での指導をもとに毎日の練習を行い、自発的に練習曲や他の楽曲に取り組み、さらに終了した楽曲をレパートリーとして常に練習に組み入れることが大切である

【成績評価基準】

- ・ 期末実技試験の評価が、60点以上であること
 - ・ 実技試験（課題曲①②）に平常点（受講および出席状況）を加味して総合的に評価
- なお、実技試験評価は複数教官（ピアノ実技担当教官）による

【テキスト】

ロマン派以降作品の他、適宜授業内に指示する

Ⅲ－2 2011年度ピアノⅡBシラバス案

ピアノⅡB

PianoⅡB

担当教員の所属：地域教育文化学部文化創造学科音楽芸術コース

開講学年：2年 開講学期：後期 単位数：2単位 開講形態：演習

【授業概要】

・ テーマ

ピアノ奏法の基本を再確認し、正確な読譜力・解釈力にもとづいた音楽形成力の発展と演奏技術の向上をはかる

・ ねらい

- I 読譜力・解釈力の育成
- II 表現力・創造力の発展
- III 演奏技術の向上

・ 目標

表現力を深め、豊かな表現のために必要な演奏技術の向上を図る。全体授業では、ポリフォニーの要素を含む楽曲を取り上げ、内容に相応しい音色、それに見合った打鍵法を習得する。

【授業計画】

・ 授業の方法

各人 30分程度の個人指導

・ 日程

第1回 ガイダンス（今後の授業の進め方・「セメスター課題」の説明を行う）

第2回 全体授業

第3回 実技演習①

第4回 実技演習②

第5回 実技演習③

第6回 実技演習④

第7回 実技演習⑤

第8回 実技演習⑥

第9回 実技演習⑦

第10回 実技演習⑧

第11回 実技演習⑨

第12回 実技演習⑩

第13回 実技演習⑪

第14回 実技演習⑫

第15回 実技試験

(学内公開)

・ 課題曲：①スカルラッチェのソナタより任意の一曲を暗譜で演奏

②ショパンのエチュードより任意の一曲を暗譜で演奏

③読譜力開発のため「セメスター課題」を3週間程度の独習により視奏演奏課題曲は
期末試験3週間程度前に掲示

◆実技演習①～⑫においては、各人の進度に合わせて授業を進める。前期試験課題曲であるスカルラッチェのソナタとショパンのエチュードを中心に、以下の点を学ぶ。

- ・ 正確な読譜力と分析・解釈力にもとづいた表現力
- ・ 演奏技術の向上と発展
- ・ 調性感、和声感、拍節感、フレーズ感
- ・ 正しい運指
- ・ 楽曲の様式感と形式
- ・ 楽曲にふさわしい音づくりとそれに見合った打鍵法
- ・ 他の楽曲も取り上げ、楽曲の解釈・演奏能力の拡大
- ・ 初見視奏

【学習の方法】

授業は個人指導によって行われるが、授業時間内における他の学生のレッスンも聴講し、その指導内容を自分自身の学習に生かすのが望ましい。また、前回の授業での指導をもとに毎日の練習を行い、自発的に練習曲や他の楽曲に取り組み、さらに終了した楽曲をレパートリーとして常に練習に組み入れることが大切である

【成績評価基準】

・ 期末実技試験の評価が、60点以上であること

・ 実技試験（課題曲①②③）に平常点（受講および出席状況）を加味して総合的に評価
なお、実技試験評価は複数教官（ピアノ実技担当教官）による

【テキスト】

スカルラッチェ：ソナタ、ショパン：エチュードの他、適宜授業内に指示する

おわりに

本論は、2010年入学生が受講するピアノⅠA／Bに続くピアノⅡ A／Bのシラバス策定を目的として書かれた。

実技系授業は個人指導の色合いが強いため、シラバスに詳細な授業計画を記載することは難しいと考えられてきた。そのため、これまでのシラバスの記載は授業の概要（テーマ・ねらい・目標）が主になり、授業計画については曖昧に記載する傾向があった。しかし、大学教育改革のなか、学生に対する授業計画の明示が強く求められ、それを受けピアノ担当教官が議論を重ね策定したのが現1年生のシラバスである。授業の柱は、これまでの指導の中で各教員が常に問題点として意識してきた読譜力の向上を目指した「楽譜を読む能力の開発」とした。

学生は当然ながら各人進捗度が異なる。しかし、正確な「読譜」があって初めて「音楽の理解」ができ、その先の「表現の世界」に到達できることはピアノを学ぶ者にとっての真実であろう。新シラバスはこの理念を全受講生の目標とし、理念達成のための新しいシステムとして全体授業、セメスター課題（独習による演奏）を導入した。ⅠAの授業において、新たに導入されたこれらの二つのシステムが実施され、既に終了している。

第1章では、実施によって得られたデータに基づき、新システムが有効に機能しているか検証を行った。検証から、筆者が期待していた以上の効果があったと確信している。新たなシステム導入が速やかに「読譜力の向上」の効果を上げるものではないが、学生の楽譜に対する意識は大いに増大し、打鍵の前に音の意味内容を考える姿勢が定着し始めていることが確認できた。

第2章ではこの結果を踏まえ、ⅡA／Bのシラバスの教育目標を「楽譜を読む能力の開発+音楽形成力の拡大」とし、導入された新しいシステムについても2年間継続することを決定し、シラバス策定を終えた。これによってⅠA／B・ⅡA／Bをトータルとしたピアノ基礎教育の枠組みが構築された。

「楽譜に残された音符は、作曲家の膨大な知識と長い推敲の上に生まれる。」このことを目先の「弾く」という行為の前に忘れられることなく、その意識化へ向けて2年間のピアノ基礎教育の枠組みが十分に機能することを期待する。

Summary

Hanako DATE, Yuriko UEKI, Machiko Koga : Syllabus Making for Keyboard Instruction II -Aiming to Expand “Formation Musicale”³-

This is a continuation of the study published in Yamagata University Journal in 2009: Syllabus Making for Keyboard Instrument Instruction. The previous work illustrated the collaborative process of developing a coherent syllabus for multiple instructors for a class called “Piano Performance I A/B.

In this paper, the authors aim to assess the content of the instruction for the class Piano Performance I B, which is to be delivered in following semester, and to revise the syllabus of Piano Performance II A/B for the following year by analyzing the questionnaire results elicited from the students who received the instruction of “Piano Performance I A” in the first semester of freshman year in 2010.

The instructional goal for the class, “Piano Performance I A” was set as “Music Formation,” which was meant to be achieved by developing the ability to read sheet music for performance purposes.

Changes made to Piano Performance I A to implement this goal were: (1) to articulate the instructional goal clearly to the students, which seems to have resulted in providing guidance for self-teaching; and (2) to introduce a semester-long assignment in order to clearly assess the achievement by each student during the semester.

The study indicated that these practices worked well to raise students’ awareness of the importance of reading sheet music and to cultivate positive attitudes toward reading sheet music.

(Section of Keyboard Instrument, Faculty of Education, Art and Science)

³ “Formation musicale” refers to a new French education system for solfège.